

## 大学寮旧趾だいがくれうきうし

〔拾芥抄曰、二条の南三条坊門の北、壬生の西坊城の東とあり。二水記曰、応仁の乱後寥々として聞へず、永正年中に至つて夫子の廟存せり、基趾きし神泉苑しんせんえんの西北茶園さえんの中にありと云云。愚按ぐあん、旧蹟今の神泉苑町しんせんえんの西にして、南北二町に亘て東西一町の間なり、此地年久しく荒廢して、寛永年中酒井侯拜領だいまやうやしきして侯第きとなる。或は曰、其頃まで大学寮と銘を彫たる石の手水鉢ありしとなり。其後何国へか移しけん今なし。又曰、一箇の古井あり、弘法大師掘さしめ給ひ独鈷水どくこすゐといふ、今かの第やしきにあり〕

## 土橋稻荷社つちはしいなりのやしら

〔二条通堀川の東、鍛冶金義かねよしが宅にあり。初めは小鍛冶宗近が家にあり、金義が祖千寿院ちほふ治法むねちかを宗近にうけて社をこゝにうつす。土橋の号は中頃二条堀川の橋■橋にして、御城追手御門筋おふてにあり、其ほとりの社なれば口称とせり〕

## 滋野井しげのゐ

〔拾芥抄曰、中御門の北西洞院の西慈野貞主卿しげのさだぬしの家とあり。今按、下立売小川の西に清泉あり、是いにしへの滋野井ならんか〕

## 二条殿家

〔二条関白良実公よしざね又福光園殿下ふくくわうをんと号す、旧址烏丸通二条の北に二条殿町にあり〕〔思ひのまゝの日記に云、

六月廿日頃、いとあつきころなれば、泉もて遊び給ふとて、二条の家に御幸あり。あるじの殿たちけいめいせらるゝ、(中略)山のすがた水の心ばへいと面白し、ひんがしに高き松山あり、麓よりわきいづる水のながれ松のひゞきをそへていと涼し。水のうへに二階を作りかけたれば、坐の中をながれ行石間の水さながら袖ひつばかりなり。流れのすゑの池のすがた、入江く島くのたゞずまひいとおもしろし。そのすゑに山を隔て五尺ばかりの瀧落たり、瀧のうへにつくりかけたる二階のさまなど、山里めきておかしう見ゆと云云〕

## 和泉井

〔烏丸通中立売からすまるにあり。此清泉紅藍の花を絞りて絹帛を染るに、紅色他方に勝れたれば、高貴の調進多し、

是名泉の美といひつべし。総て臙脂を染るは水の清潔により其色をあらはす、花洛名産の最一なるべし〕

## 少将井

〔烏丸通夷川からすまるの北、人家にあり。平安旧囷に、大炊御門の南東洞院の西惟喬親王これたかしんわうの家少将井なりと云云。清

沙納言枕草紙云、井は少将井、桜井、后町の井、千貫の井〕

## 少将井天王社

〔車屋町通夷川の北東側会所家の奥にあり、少将井御旅町といふ。いにしへ祇園神輿三坐の内、少

将井の一基は例祭の時こゝにうつし、二基は烏丸高辻大政所町に遷す。天正年中より四条京極今の御旅所にうつせり。

抑此地は京極御霊八所の生土なり、然れども祇園会七日より十四日まで祭儀をつとむ〕

兼邦百首 〔祇園の御神は素盞鳴にてまします、玉の御輿は稲田姫なり、少将井と申は八王子なり、とりわき大己貴

命なり。此神たけくおはします。又少将井とはむかし少将井の尼（後拾遺の作者なり）といひし歌読あり。その家の園

に井ありけり、かの井げたのうへに神輿をすへ奉りしより、世俗にかの王子のみこしを少将井とは申なり、是は二百余

年ばかりさきに天下にあまりねつ病はやりければ、祇園会の時王子のみこし一社少将井の上へあげ奉るなりと云云〕

## 伊勢御家

〔東洞院二条の南、歌人伊勢の家ありとぞ。旧趾詳ならず〕

〔俊頼髓■云、能因法師讚岐前司兼房の車の尻に乗てゆくに、二条と東洞院とは伊勢が家にてありけるに、子の日の松

のありけるをさきを繕ひてありけるが、生つきて誠に大きな松にてちかうまでありしが、末の見へければ車の尻より

まとひ下りける。兼房あやしみ問ければ、能因云、この松の木は功名の伊勢がむすび松に候はずや、いかでか車に乗な

がら過侍らんや、といひてはるかにあゆみて松の見ゆるかぎりは車にはのらざるとなり。（袋草紙同之）〕

家をうりてよめる

古 今

あすか河淵にもあらぬ我宿もせにかはりゆくものにぞ有りける

伊

勢

新 古今

山桜散てみ雪にまがひなばいづれか花と春にとはなん

同